

カーライル：『英雄・英雄崇拜論』再考

—MEN OF LETTERS—PRAISE TO WRITING を主に—

松藤 亨

*倉敷芸術科学大学

(2000年9月30日 受理)

I. Introduction

カーライルのいう英雄 (Hero) とは武術や戦いに勝れた強きリーダーというよりは、人生の神的意義とその実相を見抜き (recognizing the Divine Significance of Life), 見えざる天からの声を聞きわけうる魂 (the soul to hear the Voice from the Unseen Heaven) の持主, 所謂“誠意” (Sincerity) の人の意味である。この作品は生計の為, やむをえず友人の取計らいで六日間行った講演の原稿を修正加筆したものである。英雄崇拜は誠実にして偉大な心には生れつき備っている高貴な忠誠, 随順の心であり, 人類がこの世に存在する限り生き続ける心である。神の子としてすべての人が英雄心に生きる時, その国は栄え, その心すたる時, 人間世界は衰退滅亡に向かう (When the spirit of Hero-worship is inspired and everyone lives heroically as a son of God, the nation will prosper, but when the reverential spirit ceases to exist, the human world will be on the course of ruin. *On Heros, Hero-Worship, and the Heroic in History*, 1841, Centenary Edition, p. 7; 以後引用の頁数はこの原著の頁数を示す) とカーライルは警告する。彼によればこの世で人間が為しえたものの歴史は根柢に於てそこで働いた偉大な人々—英雄の歴史である。(the history of what man has accomplished in this world is at the bottom the History of Great Men who have worked there.) この解釈の下にカーライルは英雄の任務に従って6つの種類の英雄に分類して, 夫々の英雄の代表をあげてその使命と働きを解明している。宗教と自然崇拜の英雄として Odin, 予言者の英雄として Mahomet, 詩人のそれに Dante, Shakespeare, 司祭のそれに Luther, Knox, 文人のそれに Goethe, Johnson, Rousseau, Burns, ^{キング} 王の英雄に Cromwell と Napoleon をあげている。英雄の中の英雄としてイエス・キリストに言及しているのは意義深い。限られた紙数のためここでは彼があげた各英雄の特色を少しだけ述べ, 文人の英雄については少しくわしく述べ, 書くことの偉大さ大切さを共に考え, 万人英雄の理想社会を目指して, 生きる限り希望あり, (while life lasts, hope lasts for every man) と励ますカーライルの英雄心から新世紀にも学ぶべきものを求めていきたい。

II. Brief Description of Heroes in Each Area

A *The Hero as Divinity and his Virtues—Odin. Worship to Nature*

Odinはスカンディナヴィアの神話の主な神であり、宇宙の統治者である。Odinは英雄主義の最も古い主要な形をなしている。Odinは古い英語では“Woden”であり、水曜のWednesdayはこのWodenの日Woden's Dayからきている。自然と人生は不思議に満ちている。すべてのものは深く見られる時には神の栄光を表わし、すべては新鮮な心の持主にとっては奇跡である。

"This green flowery rock-built earth, the trees, the mountains, rivers, many sounding seas; -that great deep sea of azure that swims overhead; the black cloud fashioning itself together, now pouring out fire, now hail and rain; what is it? Ay, what?" (p. 8)

「この緑したたる、花咲きにおう、岩もて築かれたる大地、樹木、山嶽、河川、さまざまな音きかす海洋、一頭上に浮かぶは、かの底深き、紺碧の天海、そこを渡り吹く風、自ら集まりては形をなし、今や火を吐き、今や雨霰を降り注ぐ黒雲、これは如何なるものぞ。はて、何ぞや。」と自然の様々な力に驚きの声を発している。

我々が心と眼を開いて良く見れば、如何に全てのものがその中に聖なる美と不可思議を備えているか、如何に全てのものはそれを通して無限を見抜く窓であるかに驚くのである。人間はすべての神の創造の中で最高傑作である。「宇宙の中で只一つの神殿がある。そしてそれはthe Body of Man (人間の身体)なのである。」とカーライルは云っている。我々は神の偉大な測り知れない神秘なる存在なのである。この神の神殿でもある我々の身体もやがて死ぬのであるが、それはLaw of Mutation (輪廻^{りんね}の法則)に従っているのである。

"Though all dies, and even gods die, yet all death is but a phoenix fire-death and a new-birth into the Greater and Better! It is the fundamental Law of Being for a creature made of Time, living in this Place of Hope." (p. 39)

「万物は死に、神々すら死滅するとはいえ、すべての死はただ不死鳥的火死にして、より偉大なる、より善きものへの新生にはかならない。これは時から作られて、この希望の場所に生息する人間の、根本的なる存在の法則である。」この様に自然崇拜の代表としてカーライルはOdinを紹介している。

B *The Hero as Prophet—Mahomet* (570~632)

Mahomet は570AD に生れたが、すぐ父が死に、1歳の時母も死に、100歳の祖父に預けられた。その祖父も Mahomet 2歳の時亡くなり、それからは叔父の下で最善のアラブのやり方で育てられた。キリストの話がこのマホメットの地にも伝ってきた。このマホメットにも影響を与えたに違^{ちが}いない。

“Obscure tidings of the most important event ever transacted in this world, ‘the Life and Death of the Divine Man in Judea’, at once the symptom and cause of immeasurable change to all people in the world, had in the course of centuries reached into Arabia too; and could not but, of itself, have produced fermentation there.” (p. 51)

「世界のすべての人々にとって、測り知れない変化の徴候であり原因でもある『ユダヤにおける神の人の生と死』という世界空前の最も重要な事件に関する仄かな風説が、幾百年の間にアラビアにも届き、そこに自ら動揺を捲き起こさざるを得なかった。」

彼は25歳で彼より年上の40歳であった Kadijah と結婚、20数年の結婚生活だったが、彼女のみを一生を通して愛し抜いた。彼は孤独と沈黙の中で静かな小さき声に耳を傾けた。自然の中に深く根差した真理が彼の中で育ち、彼は自然の法則を深く尊敬した。我々の強さは神が何をしようともその中に全く委ねて了うことの中に生れると信ずるに至った。神のみが真の意味に於て力と知恵をもっている。マホメットの生活、つまりイスラムの普遍的標準である the Koran は不完全ではあるが、純粹の書物であり、“Sincerity of vision” と呼ぶべき真の直接の洞察が秘められている。すべての英雄はその洞察の眼を持ち、それは神より来るものである。“Man cannot know, either, unless he can worship in some way.” 崇拜してこそその真実がわかってくるのである。Mahomet は又可愛い娘の死をも聖句の “The Lord gives, and the Lord takes away, blessed be the name of the Lord.” を唱えて乗り越えた。“God gives us the best. We should be thankful for every thing.” とすべてに感謝する事を学び、教えていった。神への祈りの仕方を知っている人は幸いである。Self-control も彼が教え諭した美德である。マホメット教（イスラム）の本質に至ってはキリスト教と一致するのであるとカーライルは述べている。

C *The Hero as Poet—Dante and Shakespeare* (1265~1321) (1564~1616)

詩人は予言者に似ている。両者共宇宙自然人間の聖なる神秘に深く入り込むのである。自然人生の深い処にはリズムがあり、この様な深い処に探り入った人の声は自から歌となってくるのである。この歌・音楽が我々の心を宥^{なだ}め高めてくれるのである。詩人はこの

リズムとメロディをもつ言葉で真実を表現するのである。the Divine Comedyを書いたダンテは失恋を味わい人生をさ迷うが、その苦しみ淋しさから多くを学んでいった。孤独と苦しみ悲しみから心の底に感じる厳しい熱烈な詩を産み出した。彼は中世の代表であり、キリスト的瞑想を要約描写して、Divine Comedyの中で地獄、煉獄、天国を書き表した。そしてRepentance（悔改め）の大切な徳をすすめている。彼の沈黙は言葉よりも雄弁であったのである。

Shakespeareはthe Outer Life of Europeを具現し、騎士道、礼儀、ユーモア、野望、実際の考え方、行為、世間の見方を表現した。“myriad-minded” Shakespeareといわれるように彼は広い落ち着いた静かな深く見る視力と洞察力に恵まれていた。そして実際の眼にみえる事柄を歌心もて詩的に表現した。Shakespeareは又Comic spiritを教え、ユーモアと寛容と理解の心を教え、一方のみを真剣に見過ぎず、広く万物をさながらに映し出して、少しもゆがみをこしらえなかったのである。そして健康な笑いを決して忘れなかった。

“The Indian Empire will go, at any rate some day, but this Shakespeare does not go, he lasts for ever with us.”は有名なカーライルのシェイクスピアへの讃辞である。

D The Hero as Priest—Luther and Knox (1483~1546) (1505~1572)

真の司祭は眼に見えない天からの声を伝える人であり、見ることのむつかしい聖なる真理を見抜き、古くなりがちな世界を新しく更新してゆくのである。ドイツ改革のリーダーのルーテルは貧困と困難の中で神は最善を与え給うことを学び、良心の問題ととりくんでいったのである。彼はオーガスチン修道院の僧侶となったが、真の救いの問題で苦しみ、救いは人がミサをとこなえることではなく、神の無限の恵み (the infinite grace of God) によって救われることを信ずるようになった。彼は決して目上の人々に反抗しようとはしなかった。ただ神のみと進んで行くことを願ったのである。人の顔を恐れず、ただ神のみを恐れ、敬った。真理の為やむをえず protest したのである。彼は Protestantism の先駆者になり、それはフランス革命へと導いたのである。“God supports me” が彼の信念であった。

スコットランドの宗教改革者 Knox は忍耐の徳を学んでいき、英国人の資質である humour をも大切にしていた。彼の純粋な気持とこのおどけた気持の評価とが組合さって愛すべき性格を形づくっていった。彼は Theocracy 神政を声明したが、王も総理もすべての階級の人々もキリストの福音に従って歩むべしとさとした。“Walk according to the Gospel of Christ” と共に努めたのであった。

次の分野の *The Hero as Man of Letters* は後に廻してⅢとして述べる。

E *The Hero as King - Cromwell and Napoleon* (1599~1658) (1769~1821)

KingとはKönningであり、can-ningつまりAble-man出来る人有能な人という原義を持つ。有能、真実で正しく高貴な人は多くの制度施設よりも大事であるとCarlyleは教える。英国の将軍で政治家となったCromwellは放蕩の青春を少し過ごしたが、すぐ改悛^{しん}し、20歳を少し過ぎて結婚し、農地に退いて大地を耕し、聖書を読み、日毎身の廻りに召使いを集めて神を共に礼拝した。彼は祈りと信仰の人であった。やがて軍隊の指揮官になり、争いに分かれていた国を一つに治めてゆく運命の中に進んでゆくが、彼のすべての事業は祈りをもって始められた。

"In dark inextricable-looking difficulties, his officers and he used to assemble and pray alternately, for hours, for days, till some definite resolution rose among them, some 'door of hope', as they would name it, disclosed itself. Consider that. In tears, in fervent prayers, and cries to the great God, to have pity on them, to make His light shine before them." (p. 218)

「暗く解決不能と見えた難局に際しては、部下の士官と彼が集まって数時間、数日にわたって、交互に祈り続けるのを常とした。やがてある明確な解決が、彼らがよく呼んでいた『希望の門戸』が彼らの間に出てくるまで。この事を考えてみよ。涙に濡れながら熱烈に大神に祈り、且つ叫ぶのである。我らに憐れみを垂れ給え、我らの前に汝の光を輝かせ給え、と。」Cromwellは又沈黙の徳もよく知っていた。「自分の思っている事を黙って胸に収めておけない人は、大した事は何一つやりおおせない」"He that cannot withal keep his mind to himself cannot practice any considerable thing whatever."

歴史家は彼を必ずしも良く評価しないが、(王様<Charles一世>)殺しとしても、1649年)カーライルは彼を独立、信仰、誠実の士として弁護している。Cromwellが死の床で最後に述べた神への悔いし砕けし思いは「神のみが私を裁き給い、その裁きの御旨は慈悲を以ての正義」であった。その深き信仰は"If I believe not, He abides faithful."「我信ぜざるとも、神我を信じ給う」であった。臨終に際して「誠に神はよき哉、誠に神は良し、神は我をー」"Truly God is good; indeed He is good; He will notー"と絶句したが、それは、He will not leave me.「神我を離れ給うまじ」といったかったのではないかと思われる。

フランス皇帝Bonaparte NapoleonはCromwellに次いで第二のModern Kingであり、自分の利益の為に嘘をつくように誘惑され、間違ってしまった事もあったが、彼は一つの信仰と真の洞察力を持っていたとカーライルは評価している。Napoleonは真のDemocratであった。あやまった野望が彼を陥^{おとし}れたが、彼は物事の実質面を見抜く力を備えていた。

Ⅲ. The Hero As Man of letters—Goethe, Johnson (1709~1784), Rousseau (1712~1778) Robert Burns (1759~1796)

ここで文人としての英雄について、又書くことの重要性について少し詳しく述べたい。Carlyleは最も重要な資質を決めるのは霊的なものであると信じていた。“It is the spiritual that determines the most important quality.”英雄とは内的聖なる神秘の透察力を頌ち伝えるこの世の司祭である。CarlyleはGoetheを心より尊敬し、‘mild celestial radiance’おだやかな天的輝きがすべてを照らした人であり、ドイツでは今生きているすべての文人の中では最も勝れた人であると敬い、それ故おそれ多く思ったのか、彼の解説をここでは差控えている。真の文人は悲しみの宗教を知らねばならない。イエス・キリストはすべての悲しみを知り給うた。キリスト教それ自体は‘Proverty, Sorrow, Contradiction, Crucifixion, every species of Worldly Distress and Degradation’の上に建てられていると考える。多くの偉大なる人々は病的悲哀の要素の中に住んでいたものであり、その結果は我々のものではなく、神のものである。真に斗うこと、それ自体が最も高い報酬なのである。

偉大な英国の魂の一人(One of our Great English Souls)である英国の作家・辞書編集者のJohnsonも貧困に悩まされたが、それを意に介しなかった。その中であって優しい愛情と忠実な魂と、より高きものへの憧憬^{どうけい}を養っていった。彼は信じたものになることを学び、高貴な無意識の中に实际的真理に従っていった。“While life lasts, hope lasts.”「生きる限り、望みあり」と生命を大事にし、人々に対する最も大事な態度としてtolerance, love, hopeを勧めた。

Carlyleは始めフランスの哲学者、思想家のJean Jacques Rousseauのfanaticな性格や彼の顔つきをよくいっていないが、彼の孤高とその特殊な天才を認めている。Carlyleはルソーの熱心さと文明的なものより野性的なものを好む気持、真心にこめた予言的精神を尊敬した。ルソーの*Contract-Social*に見られるように母たちへの訴え、自然の讚美、自然での野性的生活がRealityにふれ、Realityへと斗わしめるのである。ルソーの心の奥には真の天の火花が宿っていたのである。フランス革命はルソーの中にその福音主義者(宣伝者)をみつけたのである。“The French Revolution found its Evangelist in Rousseau.”

最後であるが、スコットランド人の詩人Robert Burnsも若い時厳しく貧しい農夫の生活を送った。

“A noble rough genuineness ; homely, rustic, honest ; true simplicity of strength ; with its lightning-fire, with its soft dewy pity ; -like the old Norse Thor, the Peasant-god!” (p. 190)

「気高い素朴な純真さ、質朴で、鄙びて、正直で、力のある真の単純さ、電火もあれば、優しい露のような憐れみもある、さながら古代北欧の農夫の神なるソールを思わせ

る。』

あらゆる不利、貧困の厳しい中にも彼は決して微笑^{ほほえみ}と明るさを忘れなかった暖かい寛大な心の持主であった。“He never forgot smiles in his hardship.”そしてできるだけ黙ってしようと務めた。しかし一旦語り出すと軽やかで力強い言葉が流れ出た。彼はあらゆる種類のgiftを備えていた。礼儀的優雅な表現より熱情的弁論の最高の熱火に至るまで。彼の中でsunshine and joyfulnessの明るい要素と深い熱心な資質とが調和していた。そして彼の主要な資質はその誠実さであった。悲しい哉、彼は37歳の若さで世を去った。その一生を通して彼は母国Scotlandを愛した。カーライルは特に彼がその繁栄高名に登っても謙虚さと思慮分別を忘れないつつましさを評価している。逆境に耐えるよりも順境に耐えることの方がはるかに難しいのである。

IV. Concluding Remarks—Praise to Writing

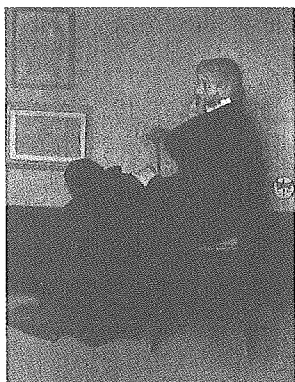
カーライルは“*This same Man-of-Letters Hero must be regarded as our most important modern person*”と文人を讃え、この文人は“*Priests to relate the vision of the inward divine mystery*”とその使命を示しその靈性を讃え、特に、“*The Art of Writing is the most miraculous of all things man has devised.*”と人間の能力の中で最高の行為は本を書き出すことだといって、書く業を最高に評価しているのである。そして「今日の真の大学、真の教会、真の議会は書物である」“*The true University of these days is a Collection of Books.*” (p. 161) “*Books are our Church too.*” (p. 163) “*Literature is our Parliament, too.*” (p. 164)とBooksやliteratureの力を称讃し自らも死ぬ迄書き続けた。彼の最後の作品は*Reminiscences*「思い出の記」であった。

本当に効果的に働いているのは新聞、詩、本などの著者、作家である。それらは現代国家の為本当に働いている効果的な教会なのであるとさへカーライルは言っている。そこにカーライルがそのmissionとして著述家、預言者の道を選んだ動機があったと思われる。

文学はそれが文学である限り、自然の黙示(an apocalypse of Nature)であり、開かれた秘密の啓示であると云っている。真の文学はたくましい精神を振起し、人生全体を取入れてゆくのである。

“*Fragments of a real ‘Church Liturgy’ and ‘Body of Homilies’, strangely disguised from the common eye, are to be found weltering in that huge froth-ocean of Printed Speech we loosely call literature. Books are our church, too.*” (p. 163)

「真の『教会祈祷書』や『説教集』の断片が、異様に変装して風俗の眼からはかくれて、かの漠然と文学と呼ばれる印刷された説話の泡沫の大海に、漂流しているのを見つけ



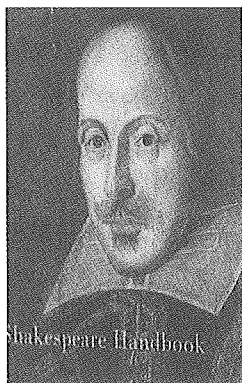
Portrait of Thomas Carlyle
by Whistler



CROMWELL (1599-1658)



Rousseau



Shakespeare



Under Carlyle's Statue in Carlyle
Park, Chelsea, London during my
European Study Tour (1976-77)



T. Carlyle

ることができる。書物はまた我らの教会でもある。」

世界史は世界の中で働いた英雄偉人の歴史であり、英雄とは先づ第一に Sincerity の人誠実の人であり、それは自然に従順の人でもある。英雄の生涯は驚くべき摂理の継起 (Wonderful birth of Providence) なのである。この英雄にならって我々も Obedience と共に Sincerity, Silence, Tolerance などの美德を修めることが肝要である。魂の更生が英雄になるために先づ必要であり、自己滅却も求められる。偉大な真実の誠実もて宇宙自然に潜む聖なる真理を直覚洞察し、その本質と一如となり、生きる限り希望もて考え続け、書き続け、霊性を磨き続けて人々にも頌ち伝えていかねばならないのである。

人類の生きゆく秘密でありこの世で最も肝要な英雄崇拜の心は、カーライルの如き純粹誠意の人にしてよく開陳できるものであり、その意味ではカーライルも又文人の一英雄に

加えてもよいであろう。更に英雄が誠実の人の謂いとせば我々一人一人が英雄の心を持ち得るのであり、その意味で万人英雄の社会こそ、カーライルの説く理想社会といえよう。我々こそ第七の英雄たりうる光栄が与えられているのである。

Carlyle のこの英雄崇拜の心から21世紀に於ても human nature 人間性は変らないものであるから新しき希望の中にこの人間性を磨き高むべく一層学び続けていきたいと願うものである。

参考文献

- Main text Thomas Carlyle : *On Heroes, Hero-Worship and Heroic in History* (ed) H. D. Traill
(Centenary Edition, Chapman & Hall Limited, London, 1897, AMS PRESS, N. Y.)
- Reference 松藤 亨：カーライルその *Moral Energy - Twinkling of Truth* 魂の文学 (あほろん社, 京都, 1983)
石田憲次：カーライル論考 (新日本図書株式会社, 大阪, 1949)
石田憲次：カーライル研究 (弘文堂書房, 1923)

その他

RECONSIDERATION of CARLYLE'S *Hero-Worship* —Emphasis on Heroes of Man of Letters—Praise to Writing—

Toru MATSUFUJI

* *Kurashiki University of Science and the Arts,*

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2000)

Heroes and Hero-Worship was originally prepared for lectures. After he rewrote the manuscript for the lectures, it came to light as the book. Heroes—great souls recognizing the Divine Significance of Life, hearing the Voice from the Unseen Heaven—can make their lives sublime.

Hero-worship, noble inborn loyalty to the sincere and great, lasts as long as mankind exists on earth. Carlyle warns “When the spirit of Hero-worship is inspired and every one lives heroically as a son of God, the nation will prosper, but when the reverential spirit ceases to exist, the human world will be on the course of ruin.”

He provides 6 categories of heroes: Hero as Dignity; Hero as Prophet; Hero as Poet; Hero as Priest; Hero as Man of Letters and Hero as King. Each hero is introduced briefly and heroes of Man of Letters are explained a little in detail here. He honors Men of Letters saying “They are priests to relate the vision of the inward divine mystery.” “The Art of writing is the most miraculous of all things man has devised,” he praises the talent of writing. He also praises the power of books and literature: “The true University of these days is a Collection of Books.” “Books are our Church, too.” “Literature is our Parliament, too.”

He himself continued to write until he died. His last work was *Reminiscences*. Only a heroic mind can speak of heroes, so I am sure Carlyle himself is a hero of letters. And we each can be the seventh heroes if we make efforts to cultivate the virtues of Sincerity, Silence, Obedience, Tolerance and so on following the Heroes.

There are inexhaustible things to learn from the heroic spirit expounded by Carlyle even in the new century as we are given the light of hope by him who encourages us saying “While life lasts, hope lasts for every man.”

* Kurashiki University of Science and the Arts part-time lecturer